



バドミントン愛知

No.
169

令和7年10月 発行者／愛知県バドミントン協会 編集者／広報委員会

第77回愛知県総合バドミントン選手権大会

令和7年5月31日(名東SC)、6月15日(中村SCにて混合ダブルス)、21日(露橋SCにて男女シングルス)、7月5日(中村SCにて男女ダブルス)が開催された。

●女子シングルス

貴田 那菜子 (豊田通商)	21 - 17 21 - 16	曾雌 玲那 (東海興業)
------------------	--------------------	-----------------

初優勝に輝いた貴田那菜子選手は初戦からどの試合も危なげなく勝ち進んだ。勝因は「この1年の努力」と言う。いつもはリードしていても、次の点を欲しがって攻め急ぎ、自滅する弱点を克服するため、苦しい練習に耐え、メンタル強化をコツコツやり続けた。その成果だと思うと、はにかみながらも誇らしげだ。

成長の跡がいくつも散りばめられていたのは木林千耀選手(東海興業)との準決勝。昨年の対戦では全く歯が立たず、これまで5度の挑戦にも1度も勝てなかった。

お互いの技術とパワーと駆け引きを総動員する心理戦を持ちこたえ、進化を証明した。

東海総合は「優勝をめざす」ときっぱり。晴れやかなその決意を応援しよう。

なお、ベスト4をかけて、準優勝の曾雌玲那選手に小細工なしの真っ向勝負で挑んだ馬場こころ選手(岡崎城西高)。敗れたものの持ち味の粘り強いプレーでファイナルゲームの最後まで戦い抜いた。来年、飛躍しそうな選手がまたひとり。楽しみだ。



貴田那菜子選手

●男子シングルス

村本 竜馬 (ジェイテクトStingers)	18 - 21 21 - 5 21 - 18	池端 元哉 (豊田通商)
---------------------------	------------------------------	-----------------

男子は順当なシード枠通り、池端元哉選手と村本竜馬選手の決勝となった。昨年と同じ対戦でリベンジに燃えた村本選手は「勝ち」にこだわった。いつもの勝気を内に秘め、「冷静にコートを広く使うこと」を心掛けた。四隅を突くショットを多用し打ち込む。それに必死に食らいつく池端選手。1ゲームはお互い一歩も譲らず接戦となるが、際どいラインアウトを池端選手が見極めてこのゲームを制した。

第2ゲームは一転、「力んでいる」と自覚があった池端選手。ショットの感覚に微妙な狂いが生じたのか、ことごとく僅かにライン、ネットに嫌われ、あっけなく落とした。

仕切り直しのファイナルゲームは見応えがあった。お互い巧みなフットワークから変幻自在に攻撃を繰り出し、要所で強烈なスマッシュを打ち込んだ。最後、ギアを上げ続け強気で振り切ってくる池端選手を静かに燃えながら受け止めた村本選手に軍配は上がった。

昨年の東海総合で優勝を飾っている村本選手。「追いかけられるプレッシャーを感じつつも身も心も整えて臨む」と準備万端だ。期待しかない。

(広報委員 山本真弓)



村本竜馬選手

●男子ダブルス

大滝 聖矢・江藤 佑太 17 - 21
(東海興業) 21 - 12 21 - 17 大関 修平・大山 翔愛
(大同特殊鋼)

第1シードの大滝・江藤組は、準々決勝までワンサイドゲーム。準決勝の家壽多慶太・農口拓弥組(大同特殊鋼)戦では競った展開になつたが、順当に決勝に駒を進めた。

一方、大関・大山組は外シードを撃破。準決勝で同チームの曾根雄太・川野稜太組を破り決勝に進出した。

第1ゲームは序盤シーソーゲームだったが、大関・大山組がインターバルを挟んで勢いに乗った。第2ゲームも序盤は大関・大山組のディフェンスが冴えリードするが、徐々に対応してきた大滝・江藤組が追い上げ、11-8で折り返した後は一方的に攻め大差で制し、ファイナルゲームへ突入した。

第2ゲームの勢いをそのままに、11-4のワンサイドゲームでコートチェンジするも、大関・大山組も粘りを見せ11-14と3点差まで詰め寄る。

しかし、ここぞというところでミスが重なり追いつけず、大滝・江藤組が栄冠を手にした。



(左)大滝聖矢選手 (右)江藤佑太選手

●女子ダブルス

中山 うらら・遠藤 心夏 21 - 17
(東海興業) 21 - 12 植村 理央・去来川 琴葉
(豊田通商)

第1シードの植村・去来川組は準決勝まで危なげない試合運びで決勝に勝ち上がり、第2シードの中山・遠藤組は準々決勝・準決勝と激戦を制しての決勝進出となった。

第1ゲームはシーソーゲームが続くが、中山・遠藤組が押し切り先取した。

第2ゲームも要所で切り返しのショットが決まり、中山・遠藤組が少しずつリードを広げる。

植村・去来川組は6-15と大きくリードされ、第1シードの意地を見せ追い上げを図るも力及ばず、粘る相手に辛抱強く対処した中山・遠藤組が余裕をもって勝ち切り優勝した。

(広報委員長 松浦孝至)



(左)遠藤心夏選手 (右)中山うらら選手

●混合ダブルス

林 寿輝弥・木村 千耀 21 - 13
(東海興業) 21 - 17 本田 光・中山 うらら
(東海興業)

シードペアが次々敗れる波乱の展開の中、共に準々決勝をファイナルゲームの末勝ち抜いてきた同じチーム同士の決勝戦となった。

1ゲーム目、序盤はお互い男子のパワフルなジャンプスマッシュを女子も負けずにレシーブでつなぐ展開となった。その後本田・中山ペアの小さなネットへのミスが続き、11-7で林・木村ペアがリードしてインターバルに入る。中盤はロングサービスを有効に使い林・木村ペアがリードを広げ、終盤は連戦の疲れからか本田・中山ペアの転倒もあって林・木村ペアが21-13でとる。

2ゲーム目は、林選手のジャンプスマッシュからのフェイントカットや、中山選手のクロスへのヘアピンなどでお互い一歩も譲らない好ゲームとなる。一時は本田・中山ペアがリズムよくゲームを展開しリードする場面もあったが、先にマッチポイントを握ったのはサーブレシーブをネット前に綺麗に落とした林・木村ペアであった。その後本田・中山ペアの粘り強い追い上げにあうが、林選手の“頑張れ！”の一言で奮い立った木村選手が渾身の力を込めて打ったスマッシュで優勝を決めた。

(広報副委員長 鈴木勝男)



(左)林寿輝弥選手 (右)木村千耀選手

第18回全国社会人クラブバドミントン選手権大会(個人戦)

6月20日(金)から6月22日(日)までの3日間、スカイホール豊田にて、全国社会人クラブバドミントン選手権大会の個人戦を開催しました。

42都道府県より、1550名を超える選手が集まり、盛大な大会となりました。3日間の会期で、約1200試合を行う過密な日程でしたが、当日の大会スタッフの尽力はもちろん、参加選手も試合間のロスタイムを短縮するなどの協力のおかげで、遠方から参加した選手が余裕をもって帰宅できる時間帯に日程を終えることができました。

ライブ配信による中継、試合結果の即時発表、アスレチックトレーナーによる選手のケアなど、日頃から行っている試合環境の向上の努力を、全国大会の舞台で活かすことができました。

大会を無事に終えられましたのも、豊田市バドミントン連盟、レディース連盟、本連盟会員のご尽力があってこそと、心から御礼申し上げます。



県協会会长 山田順一郎氏

●競り合いの続く試合の数々

本大会は、社会人として日々の限られた時間で練習を続けている選手たちが競い合う場であり、ほぼ同時期に行われている全日本実業団選手権大会とは異なる独特的な熱気に満ちた大会となりました。特に、5歳刻みで行う年代別の種目では、僅差の試合が続きました。SJリーグで活躍した選手でも、連戦の中で勝ちきれないなど、過去の戦績よりも、今の実力が試される大会となっています。

そんななか、元日本代表の藤本選手(東京都)は、年齢とともに種目を変えながらも、数年にわたって優勝記録を継続しています。特に、石橋選手(東京都)と組む混合は、圧巻のプレーで、危なげなく優勝を飾りました。各県の選手が目標として挑むなかで結果を残していく名物選手としての力を発揮していました。

●愛知県勢の活躍

地元選手が活躍し、開催地の大会を盛り上げました。優勝は10種目にのぼり、また多くの選手が入賞しました。例年苦戦しがちな若い年代の選手の躍進が印象的でした。一般男子単・30代男子複では愛知県勢同士の決勝が実現し、一般混合では準決勝に2組進出するなどの充実ぶりでした。

<https://www.all-japan-msbf.com/kojin/data/2025/result.pdf>

●一般男子シングルス決勝 川原光騎(はりーあっぷ) vs 加藤滉士(WISTARIA)

川原選手は、豊富な運動量で確実なラリーを展開し、安定した試合運びで、決勝まで危なげなく勝ち上がりました。

一方の加藤選手は、長身から繰り出すスマッシュが威力大。空調の影響が大きく、シャトルのコントロールの難しい会場において、上背のある加藤選手のスマッシュが効果的に決まり、決勝まで勝ち上がりました。

愛知対決となった決勝戦は、川原選手が圧倒した運動量で1ゲームを先取しました。しかし、コートが変わった第2ゲームは一変。風上に回った加藤選手が優位にゲームを進めて取り返し、勝負はファイナルゲームに。

川原選手は丹念にラリーを紡ぐプレーを取り戻し、僅差のまま我慢の試合展開を続けました。最後まで粘りの競り合いを制し、優勝を決めました。

手の内を知るもの同士の対戦で、互いが力を出し切った試合となりました。大きな大会で戦績のなかった川原選手にとって、全国大会優勝の栄誉は感慨深く、試合後に感極まって涙を流す姿が、連戦を乗り越えた栄冠の重さを物語っていました。

(広報委員 中村圭吾)



川原光騎選手

第41回若葉カップ全国小学生バドミントン大会

7月31日から8月3日、京都府長岡市で開催され、はりーあっぷジュニア男子チームが準優勝に輝きました。

昨年、女子チームは全国優勝の快挙を達成したものの、男子チームは愛知県予選会で敗退。悔しい思いをした6年生が中心となり、練習においては一球一球を大切に取組み、一人一人が声をかけ合い、全員でチームを引っ張り、「今年こそは」の想いで一致団結した成果が出ました。昨年とほぼ同じメンバー構成で臨んだ本戦の予選リーグでは、全員が自分たちの役割を認識し、粘り強くプレーし、競り勝つ試合が多く、勝ちを重ねることが自信に繋がりました。また、試合に出られなかったメンバーも声が枯れるまで応援することで、チームに絶対勝つんだという一体感が生まれ、最後の最後まで全力で戦うことができました。決勝トーナメントでも快進撃を続けましたが、惜しくも優勝はできませんでした。しかし、5年生以下のメンバーは既に「来年は自分たちが本戦で優勝するんだ」と目標をたて、日々の練習に取組んでいます。

中口コーチの献身的な指導をはじめ、日頃からチーム練習で切磋琢磨する女子、練習相手をしてくれる中学生など、たくさんの力添えが今回の躍進に繋がったことは間違ひありません。皆様に心から感謝申しあげます。

(はりーあっぷジュニア男子監督 青山国弘)



はりーあっぷジュニア男子チーム

理事長通信

愛知県バドミントン協会
理事長 井上 龍



令和7年4月27日に開催された総会で役員改選があり、承認された新たな役員体制で令和7年度愛知県バドミントン協会の運営を推進してまいります。

今年度の重点事業計画は、①国民スポーツ大会と第1種大会(全国大会)でのメダル獲得、②ジュニア選手に対する強化活動とジュニア指導者の養成拡大を大きな目標とし、③第20回アジア競技大会(2026/愛知・名古屋)の本格的準備、④各種大会(S/Jリーグ2025一宮大会、令和7年度東海総合大会、第18回全国社会人クラブ大会)の円滑開催を掲げました。

特に重視しているのは、アジア大会のリハーサルとして開催するS/Jリーグ2025一宮大会です。S/Jリーグ男子12チームがすべて集結するという今までにない取り組みの大会で日本最高峰のパワー、スピード、テクニックを堪能できるイベントです。観戦する方にとって楽しみな企画、ファンサービスの提供を考えていますので、ぜひ期待してください。

また、今年度は大会開催に関わる安全対策(医療役員の配置、AED配備と使用方法熟達者用意、病気、ケガの迅速対応、熱中症対策等)にも力を入れていく所存です。

会員の皆様に安心して競技していただけるように努力してまいりますので、よろしくお願ひいたします。

勝つための本物——

GOSEN
www.gosen.jp

株式会社ゴーセン 大阪本社/TEL.06-7175-7116 FAX.06-6201-0741

スポーツごころを世界に。

YONEX
®

フットワーク

この欄は、連載のコーナーとして県内各チームの紹介や
その他の記事を皆さんに続けてお届けしています。

今回は

大里東ジュニア

を紹介します。

2018年に始動した小学生中学生一貫のジュニアチームです。小さい頃から種をまき、将来、大きくなつて花を咲かせ、バドミントンで豊かな人生が送れるよう、純粋な大里東チルドレンたちの活躍を願って日々活動しています。

監督夫妻のチームマネジメントのもと、経験豊富なコーチ陣を軸に、保護者全員でサポートし、小学生も中学生も同じ基礎練習や技術練習を日々積み重ねています。また、スキル向上のみならず、礼儀や感謝、挨拶や片付け、コートマナーなどの礼節も重んじています。さらには、学年を超えて互いに励まし合う文化が根づいており、巣立ったOB・OGによる協力もあり、こうした恩送りの循環も選手の成長を支えています。

さて、この夏富士宮市で行われた第47回東海中学校総合体育大会において、男子団体チームが3位入賞という素晴らしい成績を収めました。

チームの柱であるキャプテン稻原をはじめ、川口、佐藤、日比野、井村、山内の6選手が中心となって、コートとベンチ、観客席までが一体となり、まさに「チーム一丸」で熱気満ち溢れる戦いを繰り広げました。強みであるダブルスで勝利して流れを引き寄せ、その勢いをシングルスへ繋ぐ戦い方でしたが、全国大会出場という夢には今年もあと一歩届きませんでした。悔しさも残りますが、強豪ひしめく中、この一年間の努力が結実した堂々の成績だと思います。何より仲間を信じ大きな声を響かせ最後までシャトルを追う選手の姿に大きな成長を感じました。

女子個人戦ではジュニアナショナルの河村が3位に入賞しました。当日の怪我のアクシデントを隠しながら、全国大会出場へ最後の切符をかけた3位決定戦に臨み、プレッシャーのかかる場面でも、持ち前の粘り強いフットワークとキレのあるショットで相手を搖さぶり、執念で勝利を掴みました。3年ぶりの全中出場で、チームの想いも背負いながら晴れの舞台で躍動することでしょう。

全選手が、今回の経験を糧に次のステージへ向けた更なる飛躍を目指します。チームの絆で選手の成長を支える、大里東ジュニアの挑戦に、引き続き温かいご声援をお願いいたします。

(広報委員 林由布子)



大里東ジュニア

西三河のバドミントン専門店

モリカズ

豊田市山之手3丁目100番地
☎ <0565> 29-0055

大府

JR 大府駅西口徒歩 8 分

はりーあっぷ

代表 中口直人

TEL(0562)44-5529 FAX(0562)44-5594

バドミントンプロショップ
リーダース グループ

SINCE1979

名古屋一社

地下鉄一社南出口より徒歩 2 分

(有)リーダース

代表取締役 斎田修光

TEL・FAX(052)703-2767

お知らせ バドミントンS/Jリーグ2025 まもなく開幕!!

◆「個を超えろ、チームで勝て!」

S/J LEAGUE2025一宮大会が、2年ぶりに、11/29(土)・30(日)いちい信金アリーナにて開催されます。県内の男子4チーム(ジェイテクト・豊田通商・東海興業・大同特殊鋼)と、岐阜の丸杉を含めた地域5チームをはじめ、全12チームが勢揃いになります。なんと贅沢な大会でしょう。

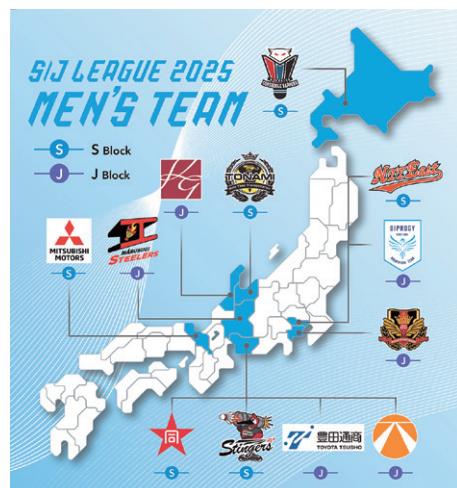
見どころは、何といっても全チームが集結する緊張感!しかも、うち8チームは開幕戦。立ち上がりは独特的の雰囲気が予想されます。

2024年シーズンは、ブロックリーグを2位通過したトナミ運輸が、TOP4でライバルを擊破し王座奪還を果たしています。2位はBIPROGY、3位には日立情報通信エンジニアリングとNTT東日本。23年シーズンに初優勝を果たしたジェイテクトは、ブロックリーグで3位に沈みTOP4に進めないなど、日本一への道のりは年々厳しさを増しており、今シーズンも激戦は必至です。

また、今大会は来年開催されるアジア・パラリンピック大会のテストマッチに位置づけられ、演出や会場の雰囲気なども体感できます。県開催初の試みとして、各コートに限定16席の「プレミアムシート」を配置しました。(3コート全48席)お気に入りチームの手書きサイン入りポスター・記念写真、練習会場見学などの特典も予定しています。

皆様お誘いあわせの上、ぜひ現地で国内トップ選手の熱い戦いをお楽しみください!

詳しくはS/JリーグHP <https://www.sj-league.jp/> をご覧ください



連盟NEWS

レディースバドミントン連盟

7月24日(木)～7月27日(日)、和歌山県において「第43回全日本レディースバドミントン選手権大会(都道府県対抗・クラブ対抗)」が開催され、愛知県からは「都道府県対抗」の部に県代表1チーム、「クラブ対抗」の部に豊田と岡崎フェニックスの2チームが出場しました。

近年、部ごとに別会場での開催が多かったが、今年は和歌山ビッグホエールとビッグウェーブと隣接した会場だったので、愛知からの応援団も大集結。たくさんの声援を受けながらの試合となりました。

「都道府県対抗」の部に出場した県代表チームは予選リーグを勝ち抜き、決勝トーナメント2回戦で昨年、準決勝で敗れた福岡と再戦。第1ダブルスのフリーペアはファイナルゲームの終盤までもつれる展開、第2ダブルスの40ペアも強敵相手に善戦したものの、悔し涙となりました。

「クラブ対抗」の部に出場した2チームも予選リーグを突破。決勝トーナメントで優勝した岐阜ソーアクラブに両チーム共に敗れましたが、全国大会常連の岡崎フェニックスはベスト8。7年ぶりに県予選会を勝ち抜き出場した豊田は3位入賞と大健闘!ベテラン選手と若手選手の融合したチーム力が光っていました。

(レディース連盟 理事長 加藤菜央子)



市町村だより

●スポーツクラブ東海バドミントン部●

8月3日（日）、東海市民体育館にて、東海市と岩手県釜石市の中学生、男女あわせて40名による姉妹都市交流会が開催されました。これまで釜石市の交流事業については、ラグビーやバレーボールなど様々な競技でも継続されており、今回はコロナ禍を経て6年ぶりの開催です。

当日午前は大同特殊鋼バドミントン部の男子選手5名を招いて講習会を実施。選手への質問コーナーや、苦手なフットワークやラウンドストロークなどの指導を直接受けたり、大同選手へのゲームチャレンジ、大同チーム選手同士のゲームを観戦したりしました。特に釜石の中学生たちはトップ選手のプレーに直接触れる機会が少ない事もあって、S/Jリーガーの激しい攻防に一喜一憂し目を輝かせていました。



大関修平



川野稟太



大山翔愛



曾根雄太



農口拓弥



午後からは中学生同士の交流試合を行いました。はじめは方言が恥ずかしいと大人しかった釜石の中学生たちでしたが、終盤の釜石市と東海市の混成チームによる団体戦の頃には、すっかり打ち解けあって気兼ねなくオーダーを話し合う姿が見られました。

交流試合のあとは全員で銭湯に行って汗を流し、夕食懇親会は大騒ぎ、大変な盛り上がりでした。最後はお互に別れを惜しむ声も聞かれ、夏休みの楽しい思い出となりました。

来年は当方から釜石市へ出向き、更に親睦を深める予定とあって、今からとても楽しみにしています。ご協力いただいた全ての関係者に、心より感謝を申し上げます。

（スポーツクラブ東海バドミントン部 上枝 伸）

審判連載 ルールブック講座

第15回 「サービスを不当に遅らせること」 池上 信之



競技規則第9条 第1項(1)『サーバーとレシーバーがそれぞれの態勢を整えた後は、両サイドともサービスを不当に遅らせてはならない』となっています。令和7年度の通称「緑本」に『サーブやレシーブの位置についたなら、プレーヤーが、準備ができていないことを示すために手をあげている場合でも、サーバーが立って何もしない場合やラケットを左右に動かしている場合でも過度の遅延は不当な行為になり、主審の判断でサーバーまたはレシーバーに遅延行為としてフォルトにする場合がある』と注釈が付け加えられました。

よくレシーバーが手をあげて『待て』を示しますが、その行為自体がフォルトではなく、速やかにレシーブする態勢をとらないことが『フォルト』の対象になるのです。ただ、注意したいのは『何秒』という規程ではなく、あくまで主審の判断だということ。つまり、サーバーとレシーバーは、ラリー終了後には、それぞれ、次のサービスに備えて速やかに体制を整える必要があります。

一般的に『バドミントンの試合時間は長い』と指摘があります。インプレーからインプレーの間を短く、スピーディーにマッチ（試合）をすることが求められています。

編集後記



8月の世界バドミントン選手権で山口茜選手が3度目の世界王者に輝きました。女子シングルスでは史上最多タイだそうです。S/Jリーグで見たプレーを思い出し感動がよみがえりました。

そのS/Jリーグが2年ぶりに愛知県で開催されます。男子全12チームが集結し、地元チームとしてジェイテクト、東海興業、豊田通商、大同特殊鋼の4チームが参戦します。

これはみんなで応援に行くしかありません！

（広報副委員長 鈴木勝男）

連絡
投稿

〒485-0041 小牧市小牧2-212

広報委員長

松浦 孝至（まつうら たかし）

公式サイトアドレス
<https://www.badminton-aichi.com/>

Eメールアドレス
info@badminton-aichi.com

